

Weekly Bulletin 2022-2023

第2510地区
Rotary
札幌東ロータリークラブ



6月15日(木) 第33号
第3049回 例会

本日の
プログラム

新会員卓話 重松高浩 会員

札幌モーニングRCのカミネッコン植樹計画

札幌モーニングRCカミネッコン植樹・地域共同特別委員長 宮部光幸 氏

昭和56年の台風12号による災害は、観測史上最高と言われた豪雨によるものでした。この56年災害により、当時の石狩川の治水は不十分であることが判明し、堤防・道路を2m嵩上げし、橋を架け替えたのです。嵩上げ前の堤防には河畔林があり、根が土を固めることで水害予防になっていましたが、嵩上げ後の堤防には木がないため、北大農学部・防災工学の東三郎名誉教授が植樹を提唱し、開発局・道庁・札幌市等に働きかけ、約100万本を植樹することになりました。しかしながら、100万本という本数は公共工事だけでは不可能であるため、市民運動による植樹も進めることにしました。

その際に東三郎名誉教授が考案した、再生紙や古紙を素材にした再生ダンボールを使った組み立て式の植栽用の紙ポットが『カミネッコン』です。培養土と苗木を入れて少し育て、森をつくりたい場所に設置すると、ポットはやがて風化してなくなり、数年後には小さな森ができるという仕組みです。

私は、2000年に石狩図書館緑地のカミネッコン植樹に参加し、東三郎北大名誉教授の主催する『北の森づくりサークル』より植樹技術の指導を受けました。翌2001年クラブの環境保全活動として北海道教育大学・付属小学校のPTA活動との合同形『地域の学校等十ロータリー』として発足しています。

この活動は2003年、クラブの継続事業となり、本年で20年を迎えます。これらの育樹は概ね順調であり、先の石狩図書館緑地の樹木は間伐を行い6m余となっています。この20年余の活動は、活動の継承等の課題を乗り越え継続中ですが、更なる植樹活動の拡大を目指し、2018年江別ロータリークラブとの連携で『旧豊平川河岸に原始の森を創る150年プロジェクト』に着手しております。

当プロジェクトは北海道命名150周年に着想を得て、札幌本府開闢期に旧豊平川が江別・対雁～札幌間の遡航路であった事績を歴史遺産とすることを目的に企画しました。開拓初期、原始の森を流れる旧豊平

川を遡上する開拓の人々の原体験を追体験し、150年先の未来に向け、失われた河畔林を再生する全長12km(対雁～東雁来間)、札幌・江別の両市を横断するプロジェクトで、当プロジェクトはSDGsに沿った活動ともなっています。

石狩平野は6000年前まで、汽水湖・古石狩湾であり、北海道は大湿地で分断された南北2島であったのが、その後の海退で大湿原となり、そこに支笏火山の火山灰台地からの噴出物が堆積したのが道央圏低地です。この内、望月寒、月寒、厚別、小野幌川の中小河川が流入する大谷地原野は原生樹を伐採後、多くが軍馬向けの牧草採取地でした。低湿地であり流入は逆川(さかさがわ)となっていたのが、昭和19年に捷水路(しょうすいろ)が完成し、現在の豊平川となっています。その後、河畔地は河川敷地となり、遊水地となっていますが、土地利用は放棄地の状況であり、SDGs Goal 15“陸の豊かさを守ろう”の達成目標とされている『森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る』の対象と考えられます。ここを150年前の原生林に戻す『リワイルディング・Rewilding』のプロジェクトです。植樹苗には野幌森林公园、札幌白旗山の2か所の原始林等からの実生株を充てることとし、土地の原植生を再現することを目指しています。一方、野幌の実生株は自然公園の採取不許可の条例があり、このため、北海道知事の特別許可を得、『空知総合振興局+北海道博物館+江別クラブ+札幌モーニングクラブ4者協定(2019年)』を結び採取しています。



2022-23年度 国際ロータリーのテーマ

「イマジンロータリー」

国際ロータリー会長:ジェニファー・ジョーンズ

■本日のロータリーソング

我等の生業

